

## 平成 30 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

平成 31 年 4 月 23 日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	岩下明裕	スラブ・ユーラシア研究センター・教授
班員	2		
	氏名		所属機関・職
	川久保文紀		中央学院大学・教授
			専門とする研究分野
		ボーダースタディーズ	
研究テーマ			
境界・国境の理論研究からみたボーダーツーリズム			

## 研究成果の概要

はじめに

- ・ボーダーツーリズムを研究領域として成立させるために、ツーリズム（観光学）から何を学ぶのか。ボーダーツーリズムは、地理的なボーダーだけではなく、日常性／非日常性、労働／余暇、自己／他者という多様なボーダーを乗り越えることによって、成り立つもの。
- ・ボーダーツーリズムをアカデミックなディシプリンとして進展させるために必要な理論的枠組みの構築が必要。ジョン・アリーの社会学や空間論に示唆を得て発展してきたツーリズムの応用。
- ・ボーダーツーリズムの限界を踏まえ、観光と政治の関係性の中にボーダーツーリズムの可能性を見出す。

本共同研究班におけるボーダーツーリズムの実践

- ・中口国境紀行第三弾（2018年8月末）：かつては国境紛争の最前線であった中口国境の河川国境を越えて、中国の黒河からロシアのブラゴベシチェンスクやイワノフカを訪問。現地の歴史博物館などの訪問を通じて、ボーダーを越えた歴史認識や空間の違いを体感することができた。
- ・五島 JIBSN セミナー（2018年10月末）：このセミナーでは、五島と濟州をつなぐ歴史的な結節点にこだわりながら各々の場所をめぐった。五島と濟州島も古くは遣唐使が行き交う場所であったし、食・生活文化の観点からすれば、五島の五島豚は特産物のひとつであるし、濟州島の城邑民俗村においても畜産業としての豚の飼育が濟州島の生活に欠かせないものであったことを学んだ。ボーダーを越えた2つの生活空間を結ぶいくつかの切り口の所在を確認しながら旅したことは有意義。
- ・ボーダーツーリズムは、普通の人びとが日常生活のなかで異なる民族や文化をもつ他者と出会い、地理的・文化的接触を通じて共存を模索する中にその意義が見いだされる。

<p>研究成果の概要（続き）</p> <p><u>ボーダーツーリズムの限界</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（ボーダー）ツーリズムの限界をどう認識するのか。井出明氏による問題提起（「地域と大学は観光に頼るようになったら終わりだ」、「観光は、流行り廃りも大きく、先が読めない産業」に対して、どのように応答するのか（『ダークツーリズム』幻冬舎新書、2018年）。</li> <li>・研究者の専門性と一般観光客の興味・関心のズレ：企画内容と集客力のジレンマ</li> <li>・自治体と旅行社の協力関係：「個人」の力によるところが大きい</li> </ul> <p><u>まとめ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2つのボーダーの交錯を理論的にどう捉えるのか：<u>地理的なボーダーとツーリズム間のボーダー</u></li> <li>・ボーダースタディーズを○○○ツーリズム間の様々なボーダーを越えていく「生成運動そのもの」とすること⇒地域への「気づき」、「発見」、「空間の違いを見せる」</li> <li>・ボーダーをどう意識させるのか、空間の切り方の問題（切り口の断面の見え方）</li> <li>・モビリティに常に開かれているのは、一部のグローバル・エリートたちに限定される傾向（ジョン・アーリ『オフショア化する世界』明石書店、2018年）があることも踏まえると、モビリティに内在する「権力性」と「透過性」の問題を捨象できない→観光政治学の理論的アプローチ</li> <li>・ボーダーを越えて対立・矛盾する要素を媒介・接続する生成運動へ</li> </ul>
<p>主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。</p> <p>岩下明裕「進化するボーダースタディーズー私たちの現場とツーリズム」『境界研究』第9号、2019年（謝辞有）</p> <p>川久保文紀「ボーダーツーリズムの可能性とその限界」公募プロジェクト型共同研究成果報告会、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2019年3月。</p>
<p>当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）</p>

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。